

二〇二三年度 高校推薦入試 作文問題

次の文章は、「**専業主婦**、**思いはそれぞれ**」というタイトルの新聞記事です。これを読んで後の問いに答えなさい。

「専業主婦は時間にもお金にも余裕がある」。そんなイメージを押しつけられているように感じるといふ当事者は少なくありません。経験や思いを聞きました。

◇病院付き添い働けない

転勤族の夫と結婚し、親族からの薦めもあり専業主婦になりました。子どもの一人が医療的ケア児で、病院の付き添いなどでとても働けません。ノンストップで一日が過ぎるのに、役所などの手続き書類には世帯主である夫の名前を書き、自分の名前を書くことがほとんどないのはつらいです。(35歳女性、専業主婦)

◇「調整力」認めてほしい

一日のほとんどを子どもとだけ過ごす中で「私は何者なんだ？」とゾツとしパートを始めました。子育てに専念する友人が「いまさら何もできない」と話していたのが印象的です。主婦は優れた調整力が必要です。それなのに正当な評価をされていないことが、自己肯定感の低さにつながるのだと感じます。(51歳女性、会社経営)

◇大学院進学したけれど

専業主婦だった35歳のときに大学院進学を決意し、念願だった大学院生になりました。「主婦業をやりながら大学院で研究をしている」というスタンスでSNS発信をすると「夫に養われて働く気がない裕福な主婦」と見なしたようなコメントが多く寄せられました。主婦や専業主婦と言っても様々な背景を持ち、様々な生き方をしている人がいるということを知ってほしいです。(40歳女性、主婦・大学院生)

◇母は「楽」、誤解でした

専業主婦だった母を見て育ちました。母の印象は「楽しげ」。それを「楽みたい」ととらえていました。自分は出産後も働くつもりでしたが、子育ては思ったよりも大変でした。そこで「母は家族の安心のために尽くしてくれていたんだ」と気づきました。(35歳女性、専業主婦)

■望む生き方、選べるように 周燕飛さん

「専業主婦」という言葉は戦後にアメリカから輸入されたもので、「裕福さの象徴」としてのイメージを持ちます。このイメージはデータにも実証されていて、「ダグラス・有沢法則」と呼ばれ、夫の収入が高いと妻の無業率は高くなるという相関関係を指します。

1990年代ごろまでは、「裕福さの象徴」として専業主婦像は定着していましたが、バブル崩壊後、夫の収入と妻の無業率は簡単な関係ではなくなりつつあるという指摘が増えています。私は、2011年の調査で専業主婦でも8人に1人は貧困世帯であるという結果を発表しました。

ただ、いまも専業主婦に「あこがれ」を抱く若い女性が大勢います。母親や祖母のライフスタイルがいまの若者にも跳ね返ってくるので、認識は少しずつしか変わらないのだと思います。

労働力の面で見ると、働きたい人が働ける環境を作ってあげることが大切だと思いますが、専業主婦に「働け」という国を挙げての大合唱になるのはいかがなものかと思っています。「専業主婦になりたい人はなればい」という選択肢を残しながらも、中立的な政策を取るべきです。「働き損」または「専業主婦損」のどちらも望ましくありません。

社会の要請としては、夫の生涯賃金が下がり、少子高齢化が進む日本では、女性が自分の能力やスキルを最大限に発揮できるキャリアの職場に戻ってくるのが期待されると考えます。そのため私は、子育てや介護など、女性がライフスタイルにあわせて一時専業主婦になったとしても、復帰後にキャリアを取り戻せるよう、専業主婦期間中も、社会とのつながりを断ち切らず、スキルアップを続けることが大事だと思います。

(『朝日新聞 2022年9月7日』夕刊より)

問 本文にもあるとおり、今後も日本では、女性も働くことがますます期待されると思われます。そんな未来を生きるあなたは、結婚や仕事などの将来のライフスタイルについて、現時点でどのような希望をもっていますか。そう考える具体的な理由を挙げながら、思い描くあなたの未来の姿を記して下さい。また、その希望を実現するために何をすればよいか、あるいは社会にどんなことを求めるかなどに触れても構いません。(六〇〇〜八〇〇字・六〇分 題名などは書かずに一行目から本文を書くこと)